

# 南から北から

東京都  
玉医ニュース  
No.516より

## おへんの話 (小児外科医の喜び)

松村 光芳

小児外科医としての喜びの一つに、幼少期に手術をし、その病気を克服して、立派に成長した患者さんと再会出来ること

がある。一人ひとりの患者はもちろん、その家族とわれわれ医療チーム

は、小児期の病気を一緒に闘った、言わば「戦友」のような不思議な連帯感

があり、特に夏休みには、昔手術した患者さんが、外来に訪ねて来てくれることも多い。

先日はAちゃんと再会した。偶然なのだが、僕の病院で母親が手術することになり、お見舞いに来たのだ。

一九九五年、彼女は未熟児かつ重度の「新生児腹壁破裂」で生まれた。

十年ちょっと前のことだが、胎児診断が常識になっている今と違い、その当時は産科の病院で生まれてから、新生児外科へ緊急搬送というパターンがまだ多かった。生まれつき臍部(おへん)周囲の皮膚が欠損していて、破裂した腹壁から腹部の臓器が外にほとんど脱出しているような状態で彼

女は生まれ、新生児仮死だった。 当番で大学病院にいた僕は緊急連絡を受けて、病院の新生児搬送用の救急車でその病院まで迎えに行き、手のひらに乗るくらい小さい彼女を、滅菌したサランラップでしっかりと包んでクベース(保育器)に入れて、慎重に搬送し緊急手術をした。術後管理は大変だったが、何回かの危機を小さい身体で克服し退院、その後すくすくと何のハンディキャップもなく育って、今ではよく笑う明るい中学生になっていた。

心とききの世間話をした後で、「ねえ、Aちゃん君がよかったですら先生におへんを診せてくれな

い?」「うん、いいよ」と彼女。女の子らしいかわい絵柄のついた白いTシャツを捲った。

約六センチの手術痕と小さめのおへん。先天的になかったおへんを手術で造ったのだ。

「この手術の傷って気になる?」「ぜんぜん平気です」「本当?」「うん、全然。ね、お母さん

だってこの傷がなかったら、私は生まれてすぐに死んだのよって、いつもお母さん言ってる」

隣で微笑んでいる母親。「今更ですけど、何とお礼を言っているのか……」「あ、いえ、そんな。僕も本当に嬉しいんです。でも、あの時本当に頑張ったのは彼女ですから……」

別れ際に言った。「ねえAちゃん、お年頃にならんかったら、お母さん

乗るからね」

きょとんとした表情で、母親を見るAちゃん。お母さんが爆笑した。そして、涙……。僕もつられてホロリとしそうになった。小児外科医をやっているって良かったと思う瞬間だった。(一部省略)

ら、私は生まれてすぐ死んだのよって、いつもお母さん言ってる」

隣で微笑んでいる母親。「今更ですけど、何とお礼を言っているのか……」「あ、いえ、そんな。僕も本当に嬉しいんです。でも、あの時本当に頑張ったのは彼女ですから……」